

# 世界短編名作選

## 東欧編

監修 蔵原惟人



新日本出版社

# 世界短編名作選

## 東欧編

監修 蔵原 惟人  
編集 高橋 勝之  
直野 敦  
吉上 昭三

世界短編名作選 東欧編

---

1979年9月5日 初版  
1981年8月10日 第二刷

定価 1200円

監修	蔵	原	惟	人
編集	高	橋	勝	之
	直	野		敦
	吉	上	昭	三
発行者	松	宮	龍	起

---

郵便番号151 東京都渋谷区千駄ヶ谷3の11の8  
発行所 株式会社 新日本出版社  
電話 東京(478) 3311 (代表)  
振替番号 東京 3-13681

印刷 亨有堂印刷 製本 小泉製本

---

落丁・乱丁本がありましたらおとりかえいたします。  
本書の内容の一部または全体を無断で複製複製(コピー)して配布することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版社の権利の侵害になります。小社あて事前に承諾をお求めください。

世界短篇名作選  
東歐編  
目  
次

〔ポーランド〕

煙	.....	コノプニツカ／小原雅俊訳	5
燈台守	.....	シエンキエヴィチ／吉上昭三訳	17
休暇に	.....	プルス／塚田充訳	35
われらを啄ばむ鴉たち	.....	ジェロムスキ／小原雅俊訳	41
ジプシーの王子	.....	シエルブルク／ザレンビーナ／関口時正訳	53
祖父ヴィンツェンテイの形見	.....	プロロク／塚田充訳	63
〔チェコスロヴァキア〕			
没落した物乞いの話	.....	ネルダ／飯島周訳	71
切手蒐集・聖夜	.....	チャペク／関根日出男訳	83
カッツ先生	.....	シュクボレツキー／中村猛訳	93

〔ユーゴスラヴィア〕

自叙伝……………スシツチ／田中一生訳 107

一杯のコーヒー……………ツアンカル／柴宜弘訳 119

聖ジョルジュ祭……………スタンコヴィチ／田中一生訳 125

窓……………アンドリツチ／田中一生訳 135

〔ブルガリア〕

帰ってきますか？……………ヴァーゾフ／松永緑彌訳 143

草刈り人たち……………エリン・ペリン／松永緑彌訳 153

白い燕……………ヨフコフ／松永緑彌訳 161

静かな夕暮れに……………スターネフ／松永緑彌訳 169

〔ハンガリー〕

石膏の天使……………コストラニー／徳永康元訳 203

農場の野獣……………	シヤルカデイ／岩崎悦子 訳	211
〔ルーマニア〕		
詩人の持ち分……………	カラジアーレ／直野 敦 訳	243
ブラジルへの移民……………	サドヴァーヌ／直野 敦 訳	251
日曜日の昼飯……………	バルブ／住谷春也 訳	261
砂漠の下の海……………	ポペスク／住谷春也 訳	269
解 説……………	直野 敦	291

# 煙

コノブニツカ  
小原雅俊 訳





マリヤ・コノプニツカ

(一八四二—一九一〇)

代表作に『線と音』(一八七九)、『ダムナタ』(一九〇〇)、『イタリヤ』(〇一)、『歴史の歌い手一七六七—一八六三』(〇四)、『新しい歌』(〇五)、『しじまの声』(〇六)などの詩集のほか、『四つの短編』(一八八八)、『わが知人たち』(九〇)、『フルマンディの岸で』(一九〇四)等の小説、児童文学に『こびとたちとみなし児マルシャ』(一八九六)がある。

貧しい部屋の窓に目をやるたびに、工場の巨大な煙突から、灰色の煙柱がもくもくと立ち上るのが見られた。わざわざ、年老いた目を仕事から離して、ほんのわずかの間なりとも、その煙に目を走らせようとすることもあった。その眼差しには、不思議な寛ぎと愛撫にも似たものがあつた。人々はさまざまな方角へせわしなく歩を運び、通り過ぎて行ったが、煙突に向かって目を上げる者はめつたにならなかつたし、青ずんだ煙のたなびきに気づく者はなおのことなかつた。ところが彼女には、煙は特別な意味をもつていた——煙が彼女に語りかけ、彼女は煙を理解した——彼女の目には、煙はほとんど生き物に近い存在であつた。

夜明け方、朝焼けが次々にその彩りを変えるオパール色の空を背に、強い、刺すような煤の匂いを撒き散らしながら、煙が、丸い、黒い管のように煙突の上に立ちこめる時、前を皮ベルトで合わせた紺の亜麻布のシャツを着込み、ブロンズの髪に軽い略帽をかぶり、首のところで大きく襟を折り返して、息子のマルツィンが、そのポイラー室のかまどのわきに立って、火をおこし、加減し、仕分けしていることを彼女は知っていた。

「おや、マルツィンが、割り振って、いるわ……」そんな時、彼女は顔をほころばせて呟いた。

確かにマルツィンは、「割り振り」作業にあたっていた。新入りの仕事熱心さで、籠の石炭を次々とかまどに投げ込んでいた。自分のと火夫のと、二人前の仕事をやりながら、彼は、自分についたばかりのポイラーマンという名が誇らしかった。その大きな、明るい炎とともに心の中に歌声が湧きあがり、それは朝早くから夜更けまで、ポイラー室にこだました。

だがしばらくすると、黒い煙の渦は白味を帯び、稀薄になり、さらに軽さを増し、ついにはふわふわした、むらのない煙柱となつて、晴れわたつた青空のもとへと舞いあがっていった。

それを眺めるとき、寡婦の胸は、喜びに躍り、晴れ晴れとした。

「すべて順調なんだわ……」と彼女は呟いた。「何もかもが。本当にありがたいことだわ！」

そうして、貧しい部屋の中を忙しくかけずり回って、自分のベッドと息子のソファベッドを整え、年期の入つた白樺ぼうきでごみを掃き出し、昼食のために暖炉の焚木に火をつけるのだった。

寡婦が住む屋根裏の住いの屋根の下から、青味がかつた

細いすじが、青空に向かつて、立派な羽飾りのような煙をあげている工場の煙突の真向いに立ちのぼるのは、その時だった。それは、老いた胸が、焚火をおこそうとして吐き出した息のように弱々しい、かほそいすじだった。

しかし、若いボーイラーマンは、必ずそのすじを目に留めた。目に留めただけではない。彼はそのすじに向かつて笑いかけるのだった。その暖炉のわきでは、真っ白な頭巾をかぶり、だぶだぶの毛皮の上着の上にバラ色の前掛けをつけた、小柄な、しなびて腰の曲がった老母が、自分のために、舌のとろけるようなバルシチか極上大麦スープを作っていることをよく知っていた。時には、これら特製スープのおいしい匂いを、はっきり嗅いだような気さえしたものだ。

そこで彼は、それまでの倍もの熱心さで、真新しいシャベル一杯分の石炭を余分にかまどに放り込む。また、火夫が何をしてよいか分からずぐずぐずしているような時には、敏捷で体の柔らかなマルツィシは、基礎壁の上に片足で立ちながら、二人前の仕事をやってのけた。

こうして互いに向かい合って、二本の吐息が——工場の吐息と屋根裏の住いの吐息とが——空にのぼってゆき、澄んだ紺碧の中に消え去っていった。あるいはそこで、一緒に消えていったのかも知れない。

工場の煙は、南の方角ではわずかに薄くなっていた。機械の巨大な肺腑が、仕事のテンポを落としていたのだった。吐き出された蒸気が、一度、二度と、鋭い、不快な汽笛を上げて大気を貫いた。すると若者が、疾風はやてのように部屋の中に飛び込んでくる。

「かあさん、めしだ！」と早くも戸口で叫んでいた。そして略帽をテーブルの上に投げ出すと、窓に吊したつぐみの籠に駆け寄った。若者の姿を目にするやいなや、つぐみは、工場の汽笛に似た間のびした啼き声をあげ、そのあと、マルツィシが教え込んだいつもの旋律を奏で始めた。若者は籠の前で立ち止まり、両手をポケットに突っ込んで、つぐみと一緒に口笛を吹く。おかげで壁がビリビリと震えたほどだ。

一方、その間に、母親は、青いアカシヤ模様のはいった美しい、黄色いテーブルクロスを食卓に広げ、大麦スープや臍物入りのバルシチや燻製肉入りえんどう豆スープ、さらには、うまくゆけば、肉だんご入りスープをフヤヤンスの深皿に出した。テーブルには、スープ皿のほかにも、この食事のベース——一山の大きなパンが出る。

若者が椅子を寄せたと思う間もなく、そのパンのほとんど半分がたちまち消えてなくなった。一切れずつ刻んでは塩のはいった小皿に潰け、しょっちゅう言葉をささむのだ

った。

「うまいパンだよ。母さん！」

「そうとも、おまえ」そのたびに寡婦は返事をした。「さあ、お食べ。どんどん食べなさい！ イエスさまとマリアさまにお礼を言うのですよ……」

若者は、母親のたのみを聞こうとはしなかったが、パンとともに、皿の中味もまた失くなっていった。そんな時、彼は言うのだった。

「うまいバルシチだよ。母さん」

母親の食べかたは、もうだいぶ前から、しだいにゆっくりとしたものになっていた。スプーンで皿をかき回し、息を吹きかける。だがどういうわけか、バルシチはいっこうに減らなかつた。こうして若者が、目の前のものをきれいに片付け、生えかけの口ひげを手の甲で拭い終わると、母親は熱心に尋ねるのだった。

「おまえ、もう少しどうだい……。わたしは今日は、こう何となく……」

食が進まないのだ、と息子に伝えたかったのだが、明らかな嘘について神を侮辱するのを恐れたのである。バルシチは申し分ない味をしていたのだから。

「そうかい母さんが食べないって言うんなら……」と若者が言う。

母親は、急いで自分の皿を若者の前に押しやりながら言った。

「さあ、さあ、おまえ、お食べ！ イエスさまにお礼を言うのですよ……」

そこで若者は、ふたたびスプーン皿にスプーンを浸す。

「母さん、いったいこのバルシチのどこが気に入らないの？ おいしいバルシチじゃないか」と尋ねる。

「それがね、おまえ」しきりにまばたきしながら母親が答える。「おいしいのかも知れないけど、わたしにはどうも、月桂樹の葉がちよっぴり足りなかつたような気がしてね……」

時には、息子が食べ残すということもあつた。

そういう時彼女は、息子に気づかれないように、食べ残しを粘土製の浅鍋に戻して暖炉の中にしまい込んだ。

この食べ残しだけは、自分だけのものとみなして、息子が家を出たあとで、パンの残りをかじりながら、それで食事を摂るのだった。

以上のことはどれもこれも、途方もない早さで行なわれていた。若いポイラーマンは、昼食のために、仕事を一時代わってもらつて家に戻つただけだから、急がなければならなかつた。食べ終わる間もなく、十字を切り、母親の痩せ細つた荒れた手に接吻すると、略帽をつかみ、

つぐみに別れの口笛を吹いてやり、屋根裏の住いから階下への階段をいっぺんに三段ずつ駆け下りていった。その間寡婦は、食卓から剥いだテーブルクロスを手にも部屋の中へ立って、不安と幸せの入り混じった微笑を浮かべて、息子の雷鳴のような足音に聞き入っていた。

「まあ、あの子ったら！」と首を振りながら言う。「あんなに急いで！ 足を折らなければいいけど……階段をこわしてしまおうわ……」

こうして彼女は、玄関のドアがボタンと閉まる音が階下からあがり、激しい砲撃のこだまのような若々しい、力強い足音が止むまで、じっと耳を澄まして立ちつくしていた。そのあとようやく、テーブルクロスを畳み、食器を洗い、火に灰をかぶせ、窓際に腰を下ろして、息子の服や下着のつくりにとりかかった。

夏であれば、さらに長い間、非常に長い間、工場の煙突が噴き上げる煙を見ることができた。おかげでまたしてもそれに見とれてしまい、思わずつくりものをとり落とししてしまったものだった……。

煙が不思議な形と色をとるためだった。

鉄製の爬行動物のように身をよじって、自分の関節から抜け出しながら、どんどん遠く、高く昇ってゆくかと思うと、軽やかなカーテンのように空にたなびき、前方にバラ

色の小雲を撒き散らした。ふんわりとまわりを波打たせて、香炉の煙のようにまっすぐに立ち上るかと思うと、兜から突き出た巨大な羽飾りのような煙が煙突から出て、風になびきながら太陽めざして燃えあがった。かと思うと、長く伸びて何かの非常に美しい形やこの世のものならぬ幽霊、まぼろしのような姿をとった……。

時には、巨大な帆船の帆のように風にふくらんだ。麻くず玉のように風に引きちぎられることもあれば、黒っぽい砂ぼこりのように吹き払われることもあった。地上が雨に降り込められた時には、煙突の上に重い雲になって垂れ込め、ちぎれ雲が屋根にまといつき、あてもなく、地上をさまよった。

冬が来ると、寡婦は暖炉にかけたランプをともし、人に売するために分厚い靴下を編んだ。

小窓からひどく風が吹き込み、腐った窓枠の隙間からは、部屋の中にまで霜が舞い込んだが、彼女は、工場を眺めるために幾度となく窓のそばに寄って行った。

屋根裏の住いの真向いには、あかあかと輝く工場の窓が連なり、その巨大な肺臓内部の作業音がとどろきわたり、鉄が当たり、ハンマーが打ちつけ、のこぎりの歯が軋み、溶解した金属の針がジュツといった。いまや、濃紺の空を背に工場の煙突から吹き上がる煙は炎のようだった。火を

吐き、火花のように火花の束を散らしていた。

そこから、幅広い照り返しが空を貫いて伸び、はるか遠方に、大きな、ひっそりとたたずむ空焼けを作っていた。

寡婦は、それを見つめて物思いに耽っていた。

小窓に射し込む工場の明りで目を覚まし、いつもの旋律を奏で始めたつぐみの啼き声が、彼女の物思いを断ち切った。部屋の中がにぎやかになり、暖炉の火がはじけた。つぐみは耳を聳する声をあげた。だが、まんまるい月が空にのぼると、炎のまぼろしはすべて、月明りの中に消え去った。

夕方遅くなって、ようやく息子が帰ってきた。そして、はやくも戸口のところでまたしても叫んだ。

「母さん、めしだ!……!」

そして、この若い、活気にみちた人間とともに、にぎやかさと笑いど朗らかさとが部屋の前にはいつてきた。若者は、今はもうそれほど急がずに食事をし、その日のことを尋ねる母親に、しばらくあれこれ話して聞かせ、そのあと大きなあくびをして、背伸びをし始めた。そうならたらもう、つぐみでさえどうでもよくなっている。

「さあ、おまえ、寝なさい。お休みなさい!」母親が頭を撫でながら若者に言う。「あしたもあげがたにはまた……!」  
「出かけるよ、母さん……。ほんとにくたびれちまったよ。」

へとへとだ」若者は眠たげな声で返事をする。

「でもおまえ、お祈りをするんですよ」母親はなおも注意を忘れない。

「するよ、母さん」

若者は母親の手に接吻し、自分のベッドの前にひざまずくと、手を組んでその上に頭を垂らし、時折、大きなあくびをして祈りを中断させながら、大急ぎ「われらが父よ」と『アヴェ・マリア』を唱えた。そのあと、騒々しく胸を叩き、一気に十字を切ると、せわしく服を脱いで固い寝台にひっくり返った。

そして若者は、たちまちのうちに寝入っていた。母親はその後もまだ長らく、金色の地に浮き出した黒ずんだ聖処女の顔の前で、『アヴェ・マリア』を低く呟いていたが、その時にはもうとうの昔に、規則正しい、深い呼吸が部屋の中にあがっていた。

ようやくランプが消え、つぐみが籠の中でバタつくのをやめ、何もかもが、明日、夜明けとともに再び目覚めんがために静まっていた。

この目覚めにはいつも苦勞がいった。寡婦の眠りは、まるで墓地での最後の眠りにつく前の生の一時を惜しむかのような、あの短く浅い、老人の眠りだった。

二番鶏のすぐあと、工場の朝一番の汽笛があがるよりず

つと前に、彼女はすでにこの眠りから覚めていた。そして  
ようやく夜具から抜け出すと、部屋の中をチョコチョコ歩  
き回りながら、息子のためにスープを作り、口の中で時禱  
を呟いていた。その頃には、大きな明けの明星が小窓にひ  
っそりとたたずみ、眠っている若者の顔をまっすぐ照らし  
ていた。母親は幾度となくその顔に目を遣った。早くこの  
一人息子を起こしたくてならなかったが、ぐっすり眠り込  
んでいるのを見て思いとどまるのだった。

「いいわ。あとほんの少し寝ていなさい……」と彼女は声  
をひそめて言った。

蒸気が吐き出されて、耳をつんざくような音があがった  
時になって、ようやく彼女は若者に向かって叫んだ。

「マルツイシ！ ほら……マルツイシ！ 起きなさい。ほ  
ら、汽笛が鳴ってますよ……」

若者は顔を壁の方に向けてしまう。

「つぐみだよ、母さん……」と夢うつつで返事する。

「まあ！ 何がつぐみですか！ 工場の汽笛が鳴っている  
んですよ！」

若者は背伸びをし、頭からふとんをかぶってブツブツ言  
うが、母親は頭として譲らない。夜の勤務が明けようとし  
ており、ボイラーマンは、労働者よりも先に、いの一歩に  
持ち場につかなくてはならないのだ。日曜日さえ例外では

なく、まるまる一週間、同じ繰り返しだった。

ところがある日、明け方までまだかなりの間がある頃、  
若者は、叫び声をあげて自分から跳ね起きて、夜具の上に  
座り込んだ。

母親はもう息子のかたわらに来ていた。

「どうかしたの？ どうかしたのかい、おまえ？」と心配  
そうに尋ねた。

若者は答えなかった。目を大きく見開いて母親の顔を見  
つめていた。唇が震え、額には冷汗が浮かんでいた。胸も  
とがはだけた寝巻が、音がするかと思われるほどの激しい  
心臓の鼓動に持ち上がった。

母親は両腕で息子を抱いた。

「どうかしたの？ どうかしたのかい？」幼な子のように  
若者を胸に抱き寄せて尋ねた。

若者は、長い間落ちつけないでいた。

「大丈夫だよ、母さん」ようやく話し出したが、無理して  
声を出しているのは明らかだった。「何でもないよ……夢  
を見たけなんだ……僕が雷に打たれた夢なんだ……」

寡婦の心臓は止まりそうだった。しかしそれを息子に悟  
らせはしなかった。話しかけようとするのだが、声が喉に  
つかえて出てこなかった。

若者は背を伸ばし、体を突っ張ってベッドに座り、驚い

た眼つきで前を見つめていた。

「雷だよ、母さん」低い、ときれときれの声で言った。「まっ赤な、竜みたいに恐ろしいやつなんだ。胸の上に落ちてきたんだ……どつても恐ろしい……まっ赤なやつが……」

若者は黙り込んだ。そして大きく喘いだ。

寡婦はどうか気持を静めて言った。

「心配ないよ、おまえ！」若者のほてった頬を撫でてやった。「心配ないよ……」夢はうたかた”ってね。心配ないよ！」

若者が歯をガチガチいわせると、彼女は息子のそばに腰を下ろし、瘦せた胸に息子の頭を押しつけて、彼がまだ乳呑児だった頃のように揺すってやった。

若者はようやく安心し、気を落ちつけてベッドに横になった。

「母さん、もういいよ。あっちへ行って休んでよ……僕は眠るから……」

だが彼は眠らなかつた。目を大きく見開いて、東の空の次第に光を失ってゆく星を凝視しながら、あおむけに横たわっていた。

母親は何度も彼の方を見た。

「おまえ、どうして眠らないんだい？」

「眠れないんだよ、母さん……」低く、訴えるような声で

答えた。

母親はそばに寄ると、若者のかたわらに腰掛けた。

「何も気にしないことだよ、おまえ」と話しかけた。「何も気にしないことだよ。あんなに慈悲深い神さまが、空に雷を隠しておいて、哀れなやもめのひとり息子を殺したりするものかね？ イエスさまやあの聖母さまがそんなことはさせませんよ……それにね、雷というのは、ひとり者の夢に出てくるときは、結婚式のお告げなんだよ。ほうら、ごらん。それが雷のお告げなのさ……わたしは夢判断の本を持ってゐるんだよ。だからわかるのさ」

瘦せた手で額をさすり、髪の毛を撫でてやりながら、笑い顔でいかにも楽しげに話してやると、ようやく若者も機嫌を直して、にっこりと笑って尋ねるのだった。

「じゃ何かい。母さんは、結婚式だっていうんだね？」

「そうだよ。そうでなくて何だって言うの。結婚式だよ。どつても豪勢な結婚式だよ……」

若者は考え込んだが、すぐに、

「母さん。もう起きるよ……」と言った。

「そうしなさい、おまえ。起きなさい……。朝ごはんを作らましよう。何か食べれば元気が出るとも」

事実、彼は元気になった。それどころか、その朝、部屋の中は、いつもよりほがらかだった。たつぷり暇があった



から、次々とつぐみと口笛で歌を競い合い、とうとう小鳥の声がかすれてしまったほどで、"とつてもベリーを食べたかったゾーシヤ"の番がやってきた時には、何とも哀れな啼き声になり、まるで誰かが鼻うたでも歌っているようだった。マルツインは笑いころげ、母親も笑いころげた。

こうして二人は楽しく別れたのであった。若者が家を出た時、寡婦は、ドアのそばに立ち、遠のいてゆく足音に耳を澄ましていた。軽やかな足どりだった。元気で伸びやかな、ふつうの若い足だった……。歪んで腐った階段までが、その日は、いつものように軋まなかった。若者がボタンとドアを後手に閉めた時になってはじめて、不意にぼんやりした不安が湧きあがり、激しく胸が高鳴った。ドアの音は、それほど空ろな、くぐもったものだった。そして何ともものすごい音をあげて、がらんとした玄関にこたましたのだった。彼女は小窓に走り寄り、身を乗り出して息子の後姿を追った。

若者は軽やかに、足早に、頭をもたげて歩いていった。そして、いままさに工場の扉の通用門をくぐろうとする時、後ろを振り返って上を見上げた。窓をだろうか、それともただ何となくそうしただけなのだろうか……。

しばらく経つと、工場の煙突から、濃い、黒々とした煙がもくもくと噴き出していた。

時間が経ち、小ぎれいに片づけられた部屋の中はひっそりと静まりかえった。鮮やかなバラの模様が黄ばんだ文字盤に描かれている古時計が、壁でものうげに時を刻んでいた。つぐみはこっけいなほどかすれ声とたたかいながら、いちばん陽気な旋律を試みていた。寡婦の方は、結婚式のお告げがあった息子の夢を思っていたのであろうか、自分の晴れ着を眺めまわしていた。

突然、すさまじい轟音があがった。壁がぐらぐら揺れ、煙突の破片がバラバラと降ってきた。小窓が外れ、激しい音を立てて落ちた。巨大な、火花だらけの煙柱が、煉瓦や倒壊した煙突の大きな破片とともに空に吹き上がり、ものすごい明るさで部屋を照らし出した。寡婦はその場に茫然として立っていた。そのこわばった口からは、悲鳴ひとつあがらなかった。白い髪が額の上にそは立ったきりだった。大きく見開いた瞳孔が、死体のそののように、不意に襲ってきた激しい恐怖を浮かべたきりだった……。

あるいは、通りであがった荒々しい叫び声さえ聞いていなかったのかも知れない。

「ポイラーマンだ！……ポイラーマンが死んだぞ！」

.....